



シリーズ■生老病死

結婚、家庭、健康、病氣、老年などというものは誰にとつても永遠の課題である。死もまた例外ではない。しかし、死は普段は意識的な考究対象にはなりにくい。なんとなく、この先には死が間違いなく待ち受けていると、おぼろげながら感じるだけである。ところが、先年、脳梗塞で倒れ、クルマの全損事故で九死に一生を得た。

爾来「死」は私の前に急に立ち現れてきた。日常生活のなんでもない狭間に死というものを意識するようになった。同時に自分を生還させてくれたサムシンググレート

の存在を肌で感じた。他者の死は確かにこれまで数多く見てきた。その都度幾ばくかの感慨を持って見てきたりもした。しかしそれは、死について十全の了解を得たことにはならない。臨死体験の書物を読んだり、家人を看取るまでの介護の本も読んだりした。医師の書く終末医療の本も興味深かった。なるほど、こうい

死

「永遠の今」を生きる



岸 眞英
曹洞宗 青松院 住職

うことかと。それはそれで貴重な蘊蓄となった。しかしなにかしっくりこない。私の死ではないからである。九十を超えて認知症気味の高齢者と共に暮らしていると、こちらが頭がボーとしてきて生も死も霞んでしまう。飲み込みの悪い小学生に算数や国語を根気よく教える教員の苦勞が身にしみてわかる。死の一步手前、老齢期を古代

のインドの人は林住期、遊行期などと表現したそうだが、そんなにかっこイイものではないのも確かである。日本の江戸時代にも松尾芭蕉なる人が漂泊詩人となり、それまで軽んじられてきた俳諧を芸

術性のあるものにしたと言われているが、俳諧老人ならぬ徘徊老人ではなかったかと毒づいてみたくなる。

生死はセイシともショウジとも。セイシは生と死が対になった熟語である。男女、吉凶、高低なんかの類である。然らばショウジは如何。これは生老病死の圧縮、簡略と見る。近畿日本鉄道を近鉄、京阪神急行を阪急、昔の日本国有鉄道を国鉄：の二字熟語への圧縮である。ショウジ即涅槃とか、ショウジの中に仏ありとか言う一層生老病死の姿を現してくる。生きることが生老病死であり、生きること

が迷いでもあり、その迷いが時間に醸成されて悟りになる。渋柿のシブそのままの甘さかな。生老病死の一つ一つ、断片をゆめゆめ軽んじてはならない。

死を思うことは生を生きることであり、「いま・ここ」而今への傾注である。孔子が「いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らんや」と言い、吉田兼好の「されば、人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に乗しまざらんや。」の謂いは如何。そう：ブーメランである。逆照射である。確かに介護を考えた、看取りに思いを馳せる事は大切なことである。特に昨今の世の中では。だが、死を思い、死に備えることに先行して我々は「即今此処」を間断なく生きているのである。死を生きることとは今を生きることであり、今を生きることとは死を生きることである。やっさもつさしながら、毎日毎日諸々の慣聞にまみれながら、この「永遠の今」を。